

第4次滋賀県子ども読書活動推進計画

(原案)

平成31年〇月

滋賀県教育委員会

- 目次 -

第1章 第4次計画の策定にあたって

- 1 子どもの読書活動推進の意義
- 2 計画策定の経過
- 3 計画の性格と役割

第2章 第3次計画期間中の成果と課題

- 1 第3次計画期間中の主な取組
- 2 指標の推移等から見た成果と課題
- 3 子どもの読書活動を取り巻く情勢の変化

第3章 計画の基本的な考え方

- 1 基本目標
- 2 基本的方針
- 3 第4次計画において重点的に取り組むべき事項

第4章 子どもの読書活動推進のための方策

- 1 子どもの発達段階に応じた読書活動の推進
- 2 家庭における子どもの読書活動の推進
- 3 地域における子どもの読書活動の推進
 - (1) 公立図書館における子どもの読書活動の推進
 - (2) 児童館や公民館等における子どもの読書活動の推進
 - (3) 文庫活動や読み聞かせボランティアなどによる子どもの読書活動の推進
 - (4) 関連機関・団体等との連携による子どもの読書活動の推進
- 4 学校等における子どもの読書活動の推進
 - (1) 幼稚園・保育所・認定こども園における子どもの読書活動の推進
 - (2) 小中学校における子どもの読書活動の推進
 - (3) 高等学校における子どもの読書活動の推進
 - (4) 特別支援学校における子どもの読書活動の推進
- 5 啓発・広報等の推進
- 6 推進体制の整備

第5章 指標の設定

[参考資料]

第1章 第4次計画の策定にあたって

1 子どもの読書活動推進の意義

人は言葉によって思考し、それを表現し、他者と対話します。人の知識や知恵、感情や想像は言葉によって記され、書物という形で時代を超えて伝えられ、今日においても日々新しく生み出されています。

読書は、本を読む過程でそうした多くの言葉を自分に取り入れ、言葉によって考えや気持ちを相手に正しく伝える力を育てます。また、読書によって個人の経験を越えた幅広い知識を得ることができます。さらに豊かな想像が表現された本は読む者に深い感動を与え、その感性や情緒を育みます。そして、何よりも読書は著者という他者の知識や考えにふれ、それと向き合い考えることによって自己を変革形成していく、人の成長にとって重要な営みです。

豊かな語彙を獲得し、情緒を育み、様々な著者の知識や考えにふれて自己を形成していくことにつながる読書活動は、子どもにとってはアイデンティティを確立し、自ら考えて生きていく力を身につけた社会の一員となるための極めて大切な活動であるといえます。

また社会の情報化が進む中、文章や図、グラフのほか他者とのやりとりを通じて様々な情報を正しく理解し、必要な要素を取り出し、整理し、相手に伝えるという力がこれまで以上に重視されていますが、日常的に本を読み、その内容を解釈し理解する経験は、そのような「読み解く力」の基盤にもなるものです。

しかしながら、読書の習慣は多くの場合自然に身につくものではありません。子どもたちを成熟した社会の一員として迎え入れるため、社会が積極的に子どもの読書習慣を育み、子どもが楽しみながら自主的に読書を行えるよう環境を整備することが肝要です。

2 計画策定の経過

インターネット等の様々な情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化、さらには、幼児期からの読書習慣の未形成などによる子どもの「読書離れ」が指摘されていたなか、子どもの読書活動の推進をするための取組を進めるため、平成13年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されました。そして同法第8条の規定に基づき、平成14年8月に国は「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」を策定し、成果と課題や子どもの読書活動を取り巻く情勢の変化等を踏まえ、平成20年に第2次基本計画、平成25年に第3次基本計画、平成30年に第4次基本計画を策定しました。

本県においては、平成17年2月に「滋賀県子ども読書活動推進計画」、平成22年3月には第2次計画、平成26年12月に第3次計画を策定し、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、また適切な時期に適切な本の楽しみに出会えるよう、積極的にそのための環境整備を推進することを基本理念として取組を進めてきま

した。このたびこれまでの取組の成果と課題、諸情勢の変化を踏まえ、さらなる本県の子どもの読書活動の推進をめざして、「第4次滋賀県子ども読書活動推進計画」を策定します。

3 計画の性格と役割

(1) 計画の性格と役割

「滋賀県子ども読書活動推進計画」は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第9条第1項の規定に基づく計画であり、本県における子どもの読書活動の推進に関する施策の方向や取組を示したものです。

また、本計画は、同法第9条第2項の規定に基づき、市町が子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画を策定する際の基本となるものであり、各市町においても、それぞれの地域の状況等を踏まえて、市町子ども読書活動推進計画の改訂や見直しを実施されるよう期待します。

(2) 計画期間

平成31年度（2019年度）から概ね5か年とします。

第2章 第3次計画期間中の成果と課題

1 第3次計画期間中の主な取組

第3次計画は第2次計画の成果と課題を踏まえ、さらなる本県の子どもの読書活動の推進をめざして策定されました。重点的に取り組むべき事項として「学校における読書活動の推進およびその拠点となる学校図書館の整備」「高校生の読書活動推進への働きかけ」を設定した上で、基本目標「すべての子どもがいつでもどこでも楽しく読書ができる環境づくり」をめざして3つの基本方針に沿って、様々な取組を行いました。

(1) 子どもが読書に親しむ機会の提供と諸条件の整備・充実

- 県立図書館では児童図書の全点購入や児童図書研究書の購入により資料整備を行い、貸出しをはじめ、おはなし会や児童図書のテーマ展示等を通じて子どもへのサービスを行いました。
- 県や関係団体主催のイベント等で、おはなし会などの読書関連事業が公立図書館やボランティアによって開催されました。
- 市町教育委員会に働きかけ、市町立図書館と共同で、小・中学校の学校図書館を児童生徒が利用しやすく、授業でも活用できるようリニューアルする「学校図書館活用支援事業」を実施しました。また、そこで培ったリニューアルとその後の活用に関するノウハウをマニュアルとしてまとめ、周知しました（平成27年度～29年度）。
- 高校生が同世代におすすめする本の紹介文を募集し、高校生が選んだ優秀作品を「しがいすくーるおすすめ本50選」としてまとめ、公表しました（平成28年度～）。
- 高校生の読書率の向上にむけてビブリオバトル^{☆1}普及の取組を実施しました。
- 司書教諭等連絡協議会の開催により、司書教諭^{☆2}の職務や学校図書館の運営・利活用等について協議し、研修を行いました。
- すべての県立高等学校に学校司書が配置されており、生徒に対する本の紹介や展示など様々な読書活動を行いました。
- 市町の公立図書館では、貸出しやおはなし会をはじめとした行事の実施、子ども向けのブックリストの作成のほか、学校のクラスや学校図書館への団体貸出、学校や幼稚園・保育所、認定こども園への出張おはなし会やブックトーク^{☆3}などを行い、子どもの読書活動を推進しました。

☆1 「ビブリオバトル」：書評合戦とも呼ばれる。各自が本を持ち寄って集まり、本の面白さについて5分程度で紹介し合い、一番読みたくなった本を参加者の多数決で決定する書評会。

☆2 「司書教諭」：学校図書館法第5条の規定に基づく学校図書館の専門的職務にあたる職員のこと、教諭であることが前提。

☆3 「ブックトーク」：1つのテーマに従って、何冊かの本をいろいろな角度から紹介し、本の楽しさを知ってもらうための手法。

- 学校では朝の読書活動^{☆1}などの一斉読書活動を実施し、児童生徒が本に親しむための指導を行いました。
- 県内外の先進事例や国の地方財政措置の紹介を行うことにより、小中学校の学校図書館への学校司書^{☆2}の配置の働きかけを行いました。

(2) 家庭・地域・学校を通じた社会全体での取組の推進

- 教職員を対象に「子ども読書学習講座」を開催し、子どもの読書に関する基礎的な知識や読み聞かせ等の技術の習得を図りました。
- 「学校司書等研修会」を開催し、学校司書をはじめとする学校関係者のスキルアップのための研修を行いました。
- 読み聞かせ等のボランティア活動を行っている地域の方々が活動の質をさらに高めるための、「子ども読書ボランティア・ステップアップ講座」を開催しました。
- 学校図書館と地域の連携をさらに進めるために県内のモデル的な事例を紹介し協議する、「学校・図書館・ボランティアを結ぶ実践発表会」を開催しました。
- 公立図書館と学校図書館の連携において、公立図書館が学校司書等の派遣を行う等、学校図書館の改善に向けた取組が行われている自治体がありました。
- 公立図書館職員と教員による連携推進委員会の組織や、学校図書館運営会議への公立図書館司書^{☆3}の参加を行う等の連携が実施される自治体がありました。
- すべての自治体で読書ボランティアの活動により、公立図書館や学校で読み聞かせ等の活動が行われました。
- 図書館まつり等を地域のボランティア等と連携して開催し、子どもや保護者に対して図書館への関心を高める活動を行った自治体がありました。
- 地域のボランティアが連携して、「子どもゆめ基金」^{☆4}の助成を活用した子ども読書関連事業を開催しました。

☆1 「朝の読書活動」：学校で始業前に、児童生徒が、自分で選んだ読みたい本を読むなどの活動。

☆2 「学校司書」：司書教諭等と連携・協力し、学校図書館の運営・活用に関する専門的業務を担当する事務職員。

☆3 「司書」：図書館法第4条の規定に基づいて図書館に設置される専門職員。図書館職員のうち、図書館の管理運営、資料の収集・整理・保存・閲覧・貸出、レファレンス・サービス等固有の専門的業務について豊富な知識、技能を有する職員（資格職）。

☆4 「子どもゆめ基金」：独立行政法人国立青少年教育振興機構に設けられている基金で、青少年教育に関する団体が行う子どもの体験活動や読書活動の振興を図る活動等に助成を行っている。

(3) 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及

- 「におねっと」^{☆1}上のサイト「子ども読書活動支援センター」において、県の取組の紹介や県内の図書館ボランティア団体等の情報提供を行いました。
- しが子ども読書活動推進協議会と連携・協力して、子ども読書活動啓発冊子の改訂作業を行い、乳幼児の保護者や学校のクラスに配布しました。また冊子の電子版を「子ども読書活動支援センター」のサイトに公開しました。
- 県立図書館において県内児童図書関係行事一覧表を作成し、関連機関へ配布したり図書館のホームページや「におねっと」上に掲載したりして情報提供を行いました。
- 各市町の乳幼児の健康診査時において、ブックスタート^{☆2}や読み聞かせ、子ども読書啓発冊子の配布を行うなど、保護者に対する啓発活動が行われました。
- しが子ども読書活動推進協議会において、計画の進行管理や関係機関の情報交換等を行いました。
- 子ども読書の日^{☆3}や読書週間には県内の学校や図書館で関連行事が行われ、子どもの読書に関しての広報・普及を行いました。

☆1 「におねっと」：県内における生涯学習に関する様々な情報をインターネットを活用して提供するため、県教育委員会が運営している学習情報提供システム。

☆2 「ブックスタート」：保健センター等で行われる0歳児健診の機会に、絵本を通じて親子のふれあいを深め、子どもの言葉と心をはぐくむことを支援するために、各地域においてすべての赤ちゃんと保護者にメッセージを伝えながら絵本を手渡す取組。

☆3 「子ども読書の日」：4月23日。国民の間に広く子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため、「子どもの読書活動の推進に関する法律」により制定された。

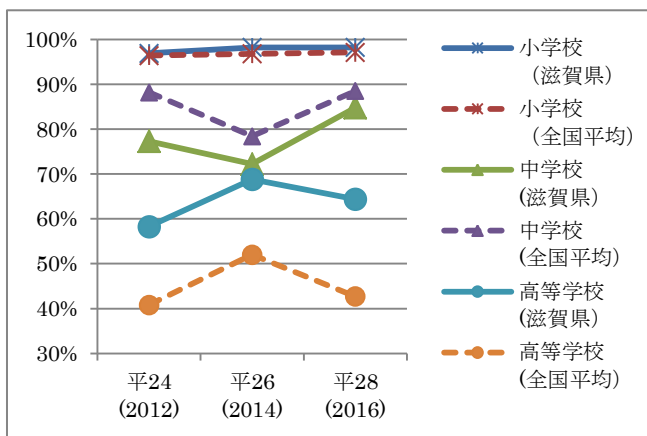
2 指標の推移等から見た成果と課題

第3次計画では、子どもの読書活動推進の推移を測る数値として8つの指標を設定し、計画の進行管理を行ってきました。

(1) 第3次計画期間中の指標の推移

ア 全校一斉の読書活動を実施している学校数の割合

全校一斉の読書活動を実施している学校数の割合は、目標値には達成していないものの、小学校・中学校・高等学校すべてで増加しており、とくに高等学校では大きく全国平均を上回っています。



小学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
96.9%(96.4%)	98.2%(97.1%)	100%

中学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
77.3%(88.2%)	84.8%(88.5%)	90.0%

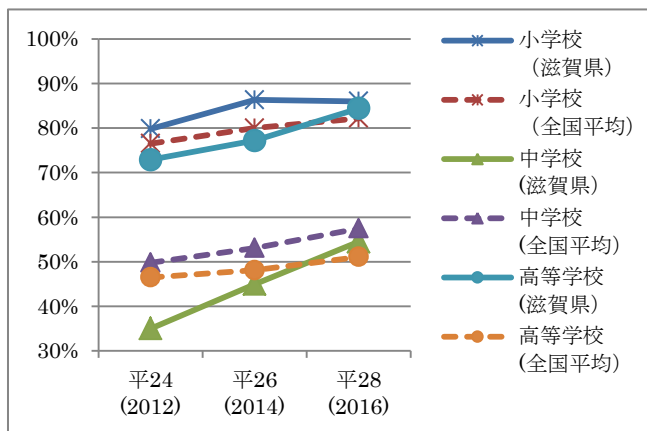
高等学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
58.3%(40.8%)	64.4%(42.7%)	60.0%

(文部科学省：学校図書館の現状に関する調査)

イ 公立図書館との連携を実施している学校数の割合

公立図書館との連携を実施している学校数の割合は、小学校・高等学校で全国平均を上回る高い割合を示しています。中学校では全国平均を大きく下回っていましたが、期間中に大きく伸びています。



小学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
79.8%(76.5%)	86.0%(82.2%)	85.0%

中学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
35.0%(49.8%)	54.5%(57.5%)	50.0%

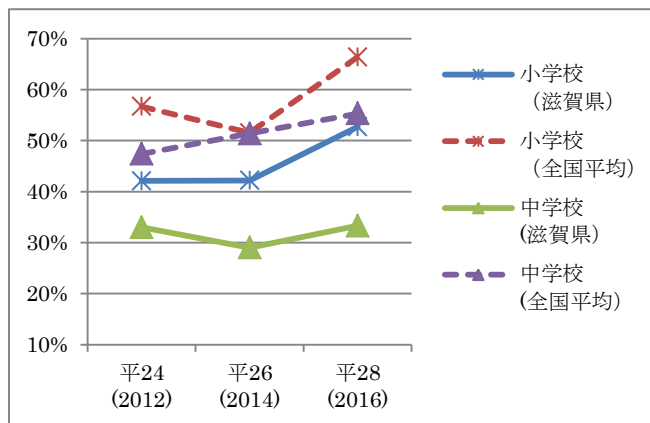
高等学校（ ）内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
72.9%(46.5%)	84.4%(51.1%)	80.0%

(文部科学省：学校図書館の現状に関する調査)

ウ 学校図書館図書標準を達成している学校数の割合

学校図書館に整備すべき蔵書の標準として定められた学校図書館図書標準を達成している学校数の割合は、小学校・中学校とも増加していますが、いまだ全国平均を下回っています。



小学校 ()内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
42.1%(56.7%)	52.7%(66.4%)	85.0%

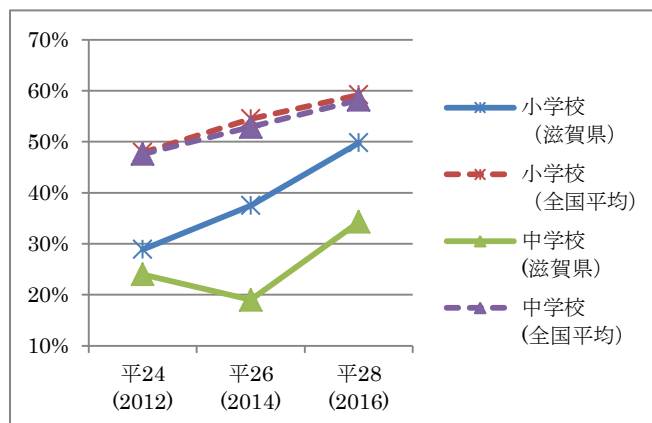
中学校 ()内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
33.0%(47.4%)	33.3%(55.3%)	65.0%

(文部科学省：学校図書館の現状に関する調査)

エ 学校司書を配置している学校数の割合

学校司書を配置している学校数の割合についても、小学校・中学校とも増加していますが、全国平均を下回っています。



小学校 ()内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
28.9%(47.9%)	49.8%(59.2%)	60.0%

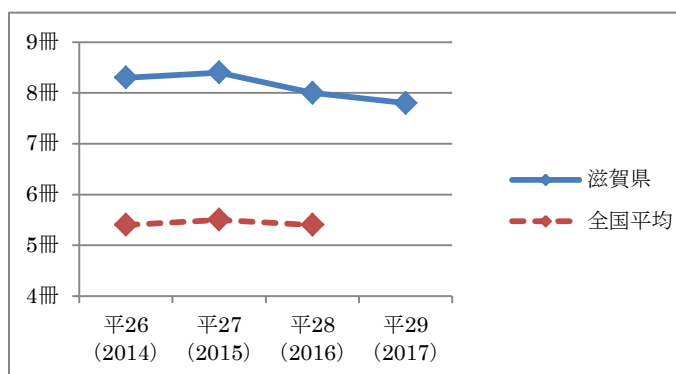
中学校 ()内全国平均

平成24年	平成28年	第3次計画目標
24.0%(47.6%)	34.3%(58.2%)	50.0%

(文部科学省：学校図書館の現状に関する調査)

オ 県民一人が公立図書館で年間に借りている図書冊数

県民一人が公立図書館で年間に借りている図書冊数は全国2位であり、依然トップレベルの高い水準を保っています。ただし、全国平均と同様にゆるやかに減少し、目標値には届きませんでした。



平成26年度 8.3冊 (全国平均 5.4冊)

↓

平成29年度 7.8冊 (全国平均 5.4冊)

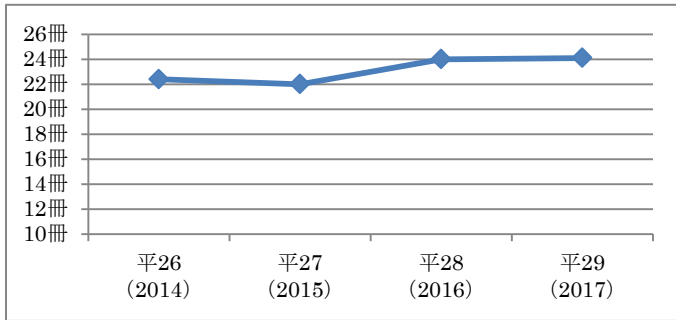
全国平均は平成28年度

(第3次計画目標値：9.0冊)

(日本図書館協会：日本の図書館統計)

カ 児童図書の公立図書館での年間貸出冊数

公立図書館での12歳以下の児童1人あたりの児童図書貸出冊数は増加しており、目標値に近い値となっています。



平成26年度 22.4冊



平成29年度 24.1冊

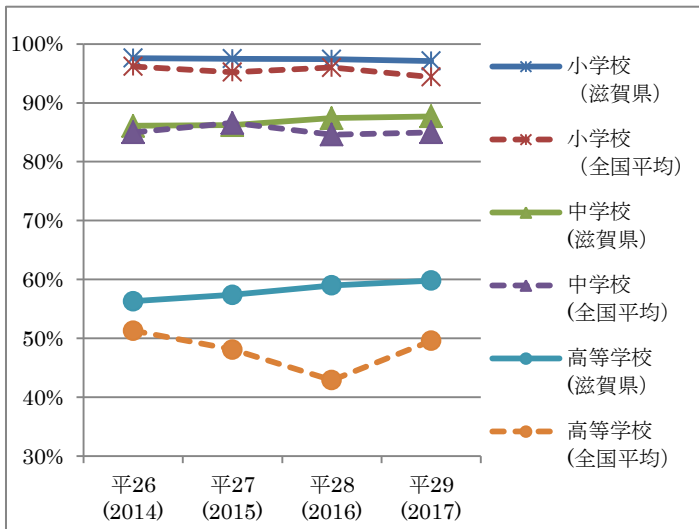
(第3次計画目標値：24.2冊)

※人口に外国人を含む

(滋賀県立図書館調査)

キ 1か月に1冊以上本を読んだ児童生徒の割合

1か月に1冊以上本を読んだ児童生徒の割合は、すべての学校段階で全国平均を上回っていますが、目標値には達成していません。学校段階が進むにつれて読書率が下がる傾向は全国と同様です。



小学校 ()内全国平均

平成26年	平成29年	第3次計画目標
97.6%(96.2%)	97.1%(94.4%)	98.0%

中学校 ()内全国平均

平成26年	平成29年	第3次計画目標
86.1%(85.0%)	87.7%(85.0%)	90.0%

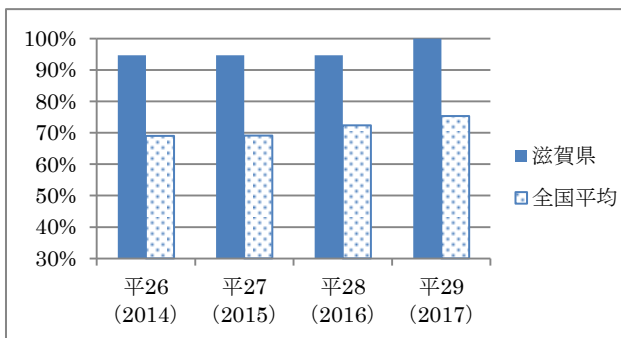
高等学校 ()内全国平均

平成26年	平成29年	第3次計画目標
56.3%(51.3%)	59.8%(49.6%)	70.0%

(全国学校図書館協議会・毎日新聞社・滋賀県教育委員会：読書調査)

ク 子ども読書活動推進計画を策定している市町数の割合

子ども読書活動推進計画を策定している市町数の割合は、平成29年度末までに県内19市町すべてで策定され、100%となりました。



平成26年度 94.7% (全国平均 69.0%)

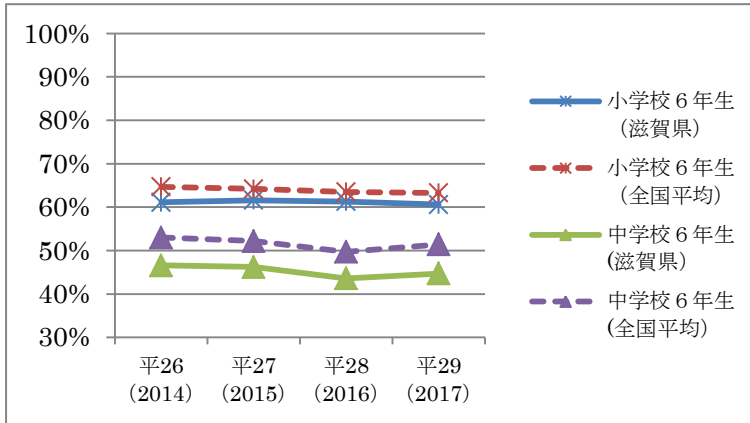


平成29年度 100% (全国平均 75.3%)

(滋賀県教育委員会調査)

ケ 学校の授業以外で平日（月曜日から金曜日）1日当たり10分以上読書している児童生徒の割合

第3次計画の指標ではありませんが、学校の授業時間以外で平日に継続的に読書している児童生徒の割合について、第3次計画中の推移を確認したところ、期間中を通じて全国平均を下回っています。



小学校6年生 ()内全国平均

平成26年	平成29年
61.1%(64.7%)	60.6%(63.3%)

中学校3年生 ()内全国平均

平成26年	平成29年
46.6%(53.0%)	44.7%(51.4%)

(文部科学省：全国学力・学習調査（児童・生徒質問紙）)

(2) 指標の推移から見られる成果

- ・児童生徒の読書率は特に中学生・高校生で上昇し、いずれの学校段階においても全国平均を上回りました。
- ・学校における全校一斉の読書活動は、第3次計画策定時に伸び悩みが課題となっていました。が、いずれの学校段階においても増加しました。また、公立図書館と学校図書館との連携も進んでいます。
- ・学校図書館図書標準の達成率、学校司書の配置率は小学校・中学校いずれでも増加し、学校図書館の環境が一定改善されました。
- ・市町における子ども読書活動推進計画の策定率は100%を達成しました。

(3) 指標の推移から見られる課題

- ・学校における全校一斉の読書活動等により、読書率は高い値を示していますが、全国的な傾向と同様に、学校段階が進むにつれて低下しています。また、学校の授業以外での読書の時間は継続的に全国平均を下回っており、自主的な読書習慣の定着に課題があると考えられます。
- ・一定改善が進んだとはいえ、学校図書館図書標準の達成率、学校司書の配置率はいずれも全国平均と比べて低く、学校図書館の環境が十分整備されたとは言えません。
- ・公立図書館での貸出冊数も減少しています。子どもに読書の楽しさを伝えるには、身近な大人が読書する機会をつくることも大切です。

(1) 新学習指導要領の公示

平成29年および30年に公示された学習指導要領では、旧指導要領の「生きる力」を育むという基本理念を引き継いだ上で、知識の理解の質を高め、資質や能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の実現と、発達段階に応じた語彙の確実な習得や情報を正確に理解し適切に表現する力の育成、各教科における言語活動の充実による言語能力の確実な育成を定めています。

また、平成29年に公示された「保育所保育指針」、平成30年に公示された「幼稚園教育要領」および「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、引き続き子どもが絵本や物語等に親しめるようにすることを定めています。

(2) 学校図書館に関わる国の施策等

平成26年に一部改正された学校図書館法では、学校司書の法的位置づけが明確化されました。また、学校司書の配置の努力義務および学校司書への研修の実施について規定されました。文部科学省では、学校図書館の運営に関する視点や学校司書の資格や養成等のあり方について検討する「学校図書館の整備充実に関する調査研究協力者会議」を設置し、平成28年に「これからの学校図書館の整備充実について（報告）」を取りまとめました。この報告を踏まえ、同年、学校図書館の運営上の望ましい基準を定めた「学校図書館ガイドライン」および学校司書に求められる知識や技能を習得できる科目等を定めた「学校司書のモデルカリキュラム」が定められました。

また、平成29年度に策定された「学校図書館図書整備等5か年計画」では、学校図書館図書の整備、学校図書館への新聞配備、学校司書の配置について、地方財政措置がとられています。

(3) 国の第4次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の策定

平成30年4月に国の第4次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」が策定されました。第4次計画では、不読率^{☆1}の改善が目標とした進捗で図られていないことから、家庭・地域・学校を通じて、様々な読書習慣の形成や読書への関心を高める取組を行うことが挙げられています。

(4) 「第3次滋賀県教育振興基本計画」の策定（※現在策定作業中）

滋賀県では、平成30年〇月に策定した「第3期滋賀県教育振興基本計画」の中で、子どもの読書活動は「読み解く力」を育むための基盤として、また生涯学習社会における主体的な学びの推進のために取り組むべき施策として挙げています。

☆1 「不読率」：1か月に1冊も本を読まない児童生徒の割合。

(5) 「これからの滋賀県立図書館のあり方」の策定

滋賀県では、平成30年3月に、県立図書館の現状と課題を把握し、今後10年間の運営の方向性とその先に目指す姿を明確にするとともに、そのために重点的に取り組むことを整理した「これからの滋賀県立図書館のあり方」を策定しました。この中で、目指す図書館像の実現のために重点的に取り組むことの項目の一つとして「子どもの読書活動の推進」を掲げ、子どもの読書のための環境整備、子どもの読書活動に関わる人々への支援、学校図書館への支援を進めることとしています。

(6) 情報化社会の進展

平成29年度に内閣府が実施した「青少年のインターネット利用環境実態調査」によると、スマートフォンの利用率は小学生29.9%、中学生58.1%、高校生95.9%となっています。また、情報端末の普及が進むとともにソーシャルネットワーキングサービス^{☆1}も拡大し、場所にとらわれない情報の送受信が可能となっています。また、平成28年の民間の読書世論調査によると、「電子書籍を読んだことがある」者の割合は、10代後半で6割を超えており、電子書籍での読書の普及も進んでいます。

このようなスマートフォンの著しい普及をはじめとした情報化の進展は、子どもの生活環境を大きく変え、読書活動にも影響を与えている可能性があります。今後、国において、スマートフォン利用の長時間化により読書活動の時間が減少している可能性や、これを活用した読書活動の推進や言語活動の充実方策について実態把握と分析を行うとされており、その結果等を踏まえて対応を検討していく必要があります。

☆1 「ソーシャルネットワーキングサービス」：人と人とのつながりを促進・サポートする、コミュニティ型のWeb上のサービス。

第3章 計画の基本的な考え方

1 基本目標

「すべての子どもがいつでもどこでも楽しく読書ができる環境づくり」

本県では、「すべての子どもがいつでもどこでも楽しく読書ができる環境づくり」をめざして、次の3つの項目を基本の方針とするとともに、子どもの発達の段階に応じた読書活動に配慮しながら、国および市町と協力して取組を進めてきました。第4次計画においても、引き続き基本方針を維持しながら、基本目標の達成にむけた取組を進めます。

2 基本の方針

(1) 子どもが読書に親しむ機会の提供と諸条件の整備・充実

子どもが自主的に読書を行うようになるためには、乳幼児期から読書に親しむような環境づくりに配慮することが必要です。

家庭、地域、学校においては、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高め、進んで読書を行う態度を養い、生涯にわたる読書習慣を身につけることができるよう、子どもの発達の段階に応じて、子ども自身が読書の楽しさを知るきっかけを作り、その読書活動を広げ、読書体験を深める働きかけを行うことが肝要です。そして、子どもが興味を持ち、感動する本等を整えることが重要です。

このような観点から、子どもの自主的な読書活動に資するため、子どもが読書に親しむ機会を提供し、それぞれが適切な本にめぐり会えるよう、子どもと本をつなぐ役割を果たす人材の育成等、人的な環境の整備に努めるとともに、施設、設備その他の物的諸条件の整備・充実に努めます。

(2) 家庭・地域・学校を通じた社会全体での取組の推進

子どもの自主的な読書活動を推進するためには、家庭、地域、学校を通じた社会全体での取組が必要です。それぞれがまずその担うべき役割を果たして子どもが読書に親しむ機会の充実を図ることはもとより、子どもの読書活動に携わる学校、図書館などの関係機関、文庫活動^{☆1}や読み聞かせボランティア等が緊密に連携し、相互に協力を図りつつ、取組を推進していくことが肝要です。

このような観点から、家庭、地域、学校それぞれが相互に連携・協力して子どもの自主的な読書活動の推進を図るような取組の推進とともに、必要な体制の整備に努めます。

☆1 「文庫」：主に子どもの読書を進めるために、個人あるいは地域のボランティアが集まって、地域の公民館や集会所、個人の家庭などで本の貸出しやおはなし会を行う場、あるいはその組織。

(3) 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及

子どもの自主的な読書活動を推進するためには、子どもの読書活動の意義や重要性について、県民の間に広く理解と関心を深める必要があります。

子どもは、大人から童話や民話などの話を聞いたり、読書する大人の姿などに触発されたりして、読書意欲を高めていきます。子どもを取り巻くすべての大人に対して読書活動を推進する気運を高めるとともに、特に、保護者、教員、保育士等が読書活動に理解と関心を持つことが子どもにも自主的な読書態度や読書習慣を身につけさせる上で重要です。

このような観点から、子どもの自主的な読書活動を推進する社会的気運の醸成を図るため、読書活動の意義や重要性について広く普及・啓発を図るよう努めます。

3 第4次計画において重点的に取り組むべき事項

上記の基本目標、基本の方針に基づく取組を進めるにあたり、第2章で見た第3次期間中の成果と課題を踏まえると、子どもが楽しみながら自主的に行う読書につながるよう、乳幼児期から発達段階に応じて、読書に対する興味・関心を高める働きかけが特に重要となります。

また、学校図書館は子どもにとって最も身近に多様な本に親しめる場所であり、学校図書館の環境整備や機能強化をさらに進めていくことが大切です。

このため、第4次計画においては

- ・就学前からの読書習慣の形成
- ・読書に対する興味・関心を広げる取組の普及
- ・学校図書館の環境のさらなる改善・機能強化

を重点的に取り組むべき事項とします。

第4章 子どもの読書活動推進のための方策

1 子どもの発達段階に応じた読書活動の推進

読書活動は、心身の成長発達と深く関わっており、子どもがそれぞれの発達段階に応じて興味を持った絵本や本を読むことは、子どもの発達課題の達成を助けることとなります。

一人の人間がどのように発達していくのかという観点から、各発達段階に応じた子どもの読書活動を推進する環境づくりを進めていくことが必要です。

また、実際の子どもの発達段階には個人差があることから、一人ひとりの発達に応じた読書活動となるよう配慮することも大切です。

(1) 乳幼児期

胎児期から聴覚は機能し、0歳から言葉を聞く喜びが始まると言われています。ブックスタートのように、0歳からの絵本との出会いを大切にする取組も進められています。

乳幼児期は、人への信頼感や基本的な生活習慣を身につけるとともに、読書能力の土台を築く時期です。この時期の読み聞かせの積み重ねは、言葉の獲得や心の成長に効果があり、豊かな心と家族の絆をはぐくむことにもつながることから、家庭や地域が中心になって絵本等の読み聞かせなどを積極的に行うことが望まれます。

就学前は、自立心が芽生えはじめる時期であり、日常生活に必要な言葉はほぼ習得され、文字に興味を示すようにもなることから、子どもが自ら興味や関心に応じた絵本等を手にとり、読んだり書いたりできるような、子ども一人ひとりへの援助や環境を整えることが重要です。

(2) 小学生期

小学生期は、生活環境が家庭から地域や学校へと広がり、社会的行動が著しく発展する時期であり、この時期に読書の喜びを知り、読書習慣を形成することはその後の人生にとって極めて重要です。

読書習慣の形成を図るためには、子どもの自主性や自発性も尊重しながら、学校で意図的・計画的な読書活動に取り組むことが大切です。また家庭や地域における読み聞かせなどを通して、子どもが日常的に読書に親しむようにすることも必要です。

そのために、子どもの身近な読書施設である学校図書館を充実し、多様な読書活動を展開できるような環境を整えることが重要です。

(3) 中学生・高校生期

思春期を迎えるこの時期は、自らのアイデンティティを確立し、人生観、世界観の基礎を培う時期です。そのため、子どもたちが自らの読書生活を振り返り、読書の幅を広げ深めるなど、多様な読書活動を通して、豊かな感性・想像力・論理的思考力・語彙力などを育むことが重要です。

一方で部活動や生徒会活動等で学校での生活時間、家庭での学習時間が著しく増加する時期でもあり、読書に割く時間が減少する傾向にあります。この時期に読書活動への関心が薄れないよう、学校をはじめ、地域や家庭を通じた取組による継続的な読書への動機づけが必要です。

また、図書館等においては、子どもたちの自立した読書活動を進めるために、読書の幅を広げ、深めることのできる幅広い蔵書の整備や、個々の子どもに応じた適切なレファレンス^{☆1}・読書相談や情報提供ができる環境を整えていくことが大切です。

☆1 「レファレンス」：利用者の求めに応じて、図書館職員等が調査・研究に必要な本の紹介や資料の検索・提供の手助けなどを行うこと。

【子どもの発達段階に応じた読書活動への主な取組】

		発達段階	乳幼児期	小学生期	中学生・高校生期
		発達課題	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的信頼感、基本的生活習慣の形成 ・自我、自立心の芽生え 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的適応 ・自主性、自発性の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイデンティティの確立 ・人生観の基礎の形成
取組主体	役割				
家庭		<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の中で子どもが本に親しむ環境をつくる ・保護者自身も本に親しみながら、読み聞かせや本を話題にした会話などにより、子どもの読書習慣を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児期から絵本の読み聞かせを行うとともに地域での読み聞かせやおはなし会へ親子で参加する。 ・公立図書館を有効に利用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・「親子読書」や家庭における「読書の時間」などを生活の一環として位置づける。 ・家庭において本に親しめる環境を工夫したり、本について話題にするなどして、子どもの本に対する関心を高める。 ・学校図書館や公立図書館を有効に利用する。 	
地域					
	図書館	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが学校外で本に親しむ場であり、地域での中核的な役割を果たす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本、児童書等の充実や児童室、児童コーナーを確保するとともに、おはなし会や展示会等を定期的開催する。 ・子どもや保護者等への絵本や児童書等に関するレファレンス・読書相談や情報提供を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・青少年向け図書資料の充実を図る。 ・中高生世代向けのコーナーの工夫やレファレンス・読書相談や情報提供を行う。 	
	児童館 公民館	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが本に親しむ身近な施設として利用される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせやおはなし会などの活動の場として活用を図る。 ・児童書等の整備や希望図書の貸出しなど読書環境の整備・充実を図る。 		
	ボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・文庫活動や読み聞かせなどの活動を通じて、子どもが本に親しむ様々な機会を提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文庫活動として、公民館、集会所等で絵本や児童書等の貸出しやおはなし会等を行う。 		
			<ul style="list-style-type: none"> ・公立図書館や幼稚園・保育所、学校等と連携して、読み聞かせ等を行う。 		
				<ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館の環境整備・運営等に協力する。 	
学校等					
	幼稚園 保育所 認定こども園	<ul style="list-style-type: none"> ・読み聞かせなど、本に親しむ機会を提供し、子どもの読書習慣を形成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味、関心、発達等に応じた絵本等や図書スペースを整備する。 ・発達段階に応じた絵本等の活用を推進するとともに、保護者の理解を深めるため、読書活動への参加を促す。 		
	学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動を充実する。 		<ul style="list-style-type: none"> ・低学年で本に親しみ、中学年で様々な領域の本を楽しむ。そして、高学年では考えながら本を読むというように発達段階に応じた読書活動を行う。 ・朝の読書など、全校的な読書活動を充実する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校では読書を通して社会への目を開き、高等学校では、主体的な読書の深化と領域の拡大を図るというように発達の段階に応じた読書指導を推進する。 ・朝の読書などにより、生涯学習につながる読書習慣を形成する。 ・中高生自身が本に対する関心を広げ、主体的な本の選択ができるようにするための支援を行う。
				<ul style="list-style-type: none"> ・公立図書館やボランティアとの連携を工夫しながら、読書センター・学習センター・情報センターとしての機能をもつ学校図書館の充実や授業での利活用をめざす。 	

2 家庭における子どもの読書活動の推進

家庭の役割

家庭は、子どもにとって生活の場の基本であり、子どもが日常生活を過ごす中で自然に本に親しむことができる環境をつくることが重要です。また、身近な大人に絵本を読んでもらったことは、子どもにとって幸せな体験のひとつにもなるものです。

そのため、家庭で気軽に本を手にとれるようにしたり、保護者が子どもの成長にあわせて、読み聞かせをしたり、いっしょに本を読んだりするなど、子どもが日常生活の中で本に親しみ、読書習慣を形成できるような工夫や配慮が必要です。

また、保護者自身も日頃から読書に親しみ、読んだ本について子どもに紹介したり、語り合ったりすることは、子どもにとって新たな読書分野の発見や読んだ本への理解を深めることにつながり、子どもの自己形成に大きな役割を果たします。

現状と課題

■ スマートフォンの著しい普及をはじめとした情報化の進展により、子どもたちの生活環境は大きく変化しています。こうした生活環境や家庭環境の変化は、子どもたちが本に興味を持ち、本に親しむ機会を減少させる一因となっています。家庭において、これらの利用に一定のルールを設け、読み聞かせ等により幼少期から読書に対する興味を持たせることは、子どもが自主的に読書活動を行う習慣を形成するうえで大切なことです。

■ 公立図書館や公民館等では、親子で参加できる読み聞かせ会等が開催されているほか、各市町の乳幼児の健康診査時には、ブックスタート等の読書啓発活動を取り入れることが定着しています。また、PTA活動の機会を活用した家庭教育や子育てに関する講座、読み聞かせや読書の重要性をテーマとした研修会も各地で行われています。

■ 家庭において、子どもの読書習慣を形成するためには、子どもへの働きかけとともに、様々な機会を通して読み聞かせや読書の効果や重要性を保護者に働きかけていく必要があります。

■ また家庭に本がある環境、本について語り合う環境をつくるため、保護者自身の読書活動に対する啓発・推進が重要であり、公立図書館は子どもとともに保護者層への利用の働きかけを行う必要があります。

施策の方向

(1) 子ども読書活動推進啓発冊子等による啓発および情報提供

家庭における子どもの読書習慣の形成を図るため、子どもの発達段階に応じた啓発冊子等をして子ども読書活動推進協議会と連携・協力して作成・配布、ホームページ上で公開することなどにより、子どもや保護者への啓発および情報提供を推進します。特に、乳幼児向け啓発冊子については、市町で実施される健診の機会を活用するなどし、広く各家庭に配布します。また、子どもにとっての読書の重要性等についても発信し、読書に対する理解の促進を図ります。

(2) 保護者に対する読書活動への理解の促進

乳幼児の健康診査時にブックスタート等を行うことは定着してきましたが、その後も継続的に行われる健診の機会においても、絵本の手渡しや読み聞かせ講座など、就学前の親子に対する読書啓発活動を行うよう働きかけます。また、PTA活動等の保護者を対象とした講座や研修会で、子どもの読書の重要性や家庭の役割を啓発することにより、保護者への理解の促進や家庭での読書活動の推進を図ります。

児童館、放課後児童クラブや子育てサークルなどに対しては、子どもの読書活動に関する情報提供を行うことにより、家庭における読書の重要性の普及・啓発に努めます。

学校においては、学校だより等を活用して読書の重要性を啓発したり、様々な読書活動への親子での参加の呼びかけを通じ、保護者に対して子どもが本に親しむことへの理解を促進します。

(3) 公立図書館の利用促進

公立図書館において、親子で参加できるおはなし会等を開催することにより、本やおはなしに親しむ機会をつくとともに、児童書や保護者層に向けた図書や行事の情報を積極的に発信することにより、図書館への来館を促します。あわせて、貸出サービスや読書相談を行うことにより、家庭での読書活動を支援します。

(4) 読み聞かせ会等の実施

児童館、公民館やコミュニティセンター等での親子で参加できる読み聞かせ会、おはなし会などの実施を促進するとともに、県や関係団体で行うイベント等にもおはなし会等のプログラムを組み入れるなどし、それら行事の情報提供に努めます。

(5) 子育て支援の取組との連携

滋賀県家庭教育協力企業協定制度（しがふぁみ^{☆1}）の普及などにより、家庭教育に理解を示す企業・事業所等が増えています。このような企業・事業所等との連携の中で、子どもにとっての読書の重要性等についての情報発信を行うことにより、働く大人たちや子育て期の保護者層に対する理解の促進を図ります。

また、保健・福祉部局と連携し、図書館や読書に関する情報を発信するなど、家庭の状況にあわせた読書推進の働きかけを行います。

☆1 「しがふぁみ」：家庭の教育力の向上に向けた職場づくりに、経営者・従業員をあげて自主的に取り組む企業と滋賀県教育委員会が協定を結び、子どもたちの健やかな育ちのための取組を推進する制度（H18年度～）。

3 地域における子どもの読書活動の推進

(1) 公立図書館における子どもの読書活動の推進

公立図書館の役割

公立図書館では、子どもたちは豊富な蔵書の中から自由に読みたい本を選び、読書に親しむことができます。また専門職である司書が読書に関する相談やレファレンスに応じ、子どもたちをよりふさわしい本へと導く手助けをします。さらに読み聞かせ会等の実施や展示などで本の楽しみを子どもたちに伝えます。どこに住んでいても、誰でも容易に図書館を利用し、読書に親しめることが重要です。

そのほかにも、読書ボランティアへの活動の場の提供、学校等との連携により子どもへのサービスを行うことなどが「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」でも定められています。

公立図書館は、司書の専門的立場からの助言や豊富な蔵書を活用した資料の提供によって各地域の様々な読書活動を支援するなど、地域における子どもの読書活動推進の中核的な役割を果たすことが期待されます。

現状と課題

■ 現在、県内には県立図書館を含め49の公立図書館が設置されており、平成29年度の児童図書総貸出数はおよそ404万冊で、全体の約37%でした。図書館における資料の充実、専門的知識を持った司書の配置、子ども読書に関する行事の拡大・充実等に力を注いできたことで、着実に児童図書が利用されています。

■ 県内市町の図書館設置率は100%ですが、身近な地域で図書館サービスを受けられない子どもたちもいます。また、障害があったり日本語を母語としないなど図書館の利用に配慮が必要な子どもたちもいます。滋賀県の子どもたちが誰でも気軽に図書館を利用できるよう努めることが重要です。

■ 県はすべての子どもへのサービスのため、子どもたちにとってより身近な市町立図書館に対する助言や支援を積極的に行う必要があります。そのために、県立図書館の蔵書や設備の一層の充実を図り、巡回協力車による資料提供、レファレンス等の援助を通じて、子どもの読書活動を直接・間接的にサポートしていく必要があります。

■ 指標の推移で見たように、本県で「公立図書館等との連携を実施している」学校は、第3次計画期間中、小中学校いずれも実施率は増加していますが、中学校の実施率は第2次計画期間中から引き続き、全国平均を下回っています。公立図書館が、引き続き資料の貸出しや司書の訪問などで子どもたちの最も身近な存在である学校図書館と連携していく必要があります。

■ 自治体の財政事情により県や市町において図書購入費の確保が困難な中、幅広い資料要求に応えるため、県立図書館は従来の協力貸出とならんで、市町立図書館間の相互貸借等の連携協力を円滑に行うための体制を整備する必要があります。

■ 情報通信技術の進展にともない、公立図書館が利用できる録音図書等のデータベースの構築・

提供が進んでいます。これらを積極的に活用することによってより幅広い資料要求に応えていくことが可能になります。

■情報環境が急速に発展し ICT の活用が欠かせない社会となる中、公立図書館には、蔵書検索を始めとする基本サービスについての情報を発信することや、誰もが多様な情報に迅速かつ容易にアクセスできる環境を整えることが求められています。

施策の方向

ア 子どもの読書の機会の提供

(ア) 子どもと本の出会いの場の提供

- a 県立図書館において、おはなし会や講座・展示等の行事を通じて、子どもと本の出会いの場を設けるとともに、市町立図書館においても、おはなし会の定期的な開催など、本に親しむ機会の提供に努めるよう働きかけます。
- b 「子ども読書の日」や「こどもの読書週間」^{☆1}には、県立図書館において、その趣旨に沿った案内・行事を行うとともに、市町立図書館にも啓発や実施を働きかけます。
- c 県立図書館において、市町立図書館の児童サービスの現状把握に努め、その支援を行います。また、情報やデータを整理し、共有化や利用者への提供を図ります。

(イ) 児童図書に関するレファレンス・読書相談^{☆2}の充実

県立図書館において、子ども、大人を問わず、子どもの本に関わるレファレンスや読書相談を行います。また、必要に応じて、読書案内のためのリストや児童室だより、調べ方案内などを作成・配布、ホームページ上で公開するなどします。

さらに、図書館サービスの向上が図られるよう市町立図書館における児童図書に関するレファレンス・読書相談などの支援に努めます。

(ウ) 障害のある子どもや外国人児童に対する図書館サービスの充実

県立図書館において、障害のある子どもの読書活動を支援するため、利用に関するニーズを把握し、「サピエ図書館」^{☆3}等外部のデータベース等も活用しながら、障害の特性にあわせた点字図書、デージー図書^{☆4}、さわる絵本等資料の収集・提供に努めます。

また、日本語を母語としない子どもが読書に親しむことができ、日本の子どもも多様な文化にふれることができるよう、外国語図書等の収集・提供やサービスの充実に努めます。あわせて、公立図書館のサービスについて、関連団体等と連携して周知を図ります。

☆1 「こどもの読書週間」：子ども読書の日を含む4月23日～5月12日までの3週間。（公社）読書推進協議会が定めた。

☆2 「読書相談」：利用者が読みたい本を選んだり、必要な資料を探したりするのを援助する図書館サービス。

☆3 「サピエ図書館」：視覚障害者および視覚による表現の認識に障害のある方々に対して全国の会員施設・団体が製作または所蔵する資料の目録情報やデータを提供する、点字図書や録音図書の全国最大の書誌データベース。

☆4 「デージー図書」：文字と音声から構成され、パソコンや専用機器等で音声を読み上げることができる録音図書の一つ。希望する見出しにジャンプして読み上げることもできる。

イ 子どもの読書のための諸条件の整備・充実

(ア) 蔵書の整備・充実

- a 県立図書館において、児童図書の全点購入を行い、資料の網羅的な収集・保存を図ることによって、市町立図書館、学校図書館、文庫等の活動や子どもの読書に関わる人々の研究を支援します。
- b 県立図書館において、子どもの読書活動に関わる人々を支援するため研究書の収集・充実に努めるとともに、広く関係情報を集めて提供します。
- c 県内各市町の子どものにとって本と出会う身近な場である市町立図書館においても、幅広い児童図書の収集と蔵書の充実に働きかけます。
- d 市町立図書館間の相互貸借体制の推進により、資料提供体制の充実に努めます。

(イ) 子どものための読書スペースの充実

子どもに対するサービスの充実に資するため、県立図書館において、館内の児童室の充実に努めるとともに、市町立図書館においても、児童室等が充実されるよう働きかけます。

(ウ) 司書の配置と専門性の向上

- a 司書は、児童図書をはじめとする図書館資料の選択・収集・提供、利用者に対する読書相談、子どもの読書活動に対する指導など、子どもの読書活動を推進する上で、極めて重要な役割を果たしており、すべての市町立図書館において専門知識を持った司書が適切に配置されるよう促します。
- b 市町立図書館の司書の専門的知識・技術の研鑽と向上のために、子どもの発達段階に対する理解を深めたり、子どもと本を結ぶ技術を高めるための各種研修の充実と参加促進に努めます。

(エ) 情報化の推進

児童図書の蔵書・貸出情報やおはなし会の開催などに関する情報等の提供が、子どもの読書活動を推進する上で重要な役割を果たしていることから、県立図書館において、さらに利用しやすいホームページや利用者用コンピュータの設置等とともに、公立図書館や大学図書館等の県内にある図書館の蔵書をインターネットで一元的に検索できる横断検索システム機能の充実に推進します。また、市町立図書館においても、インターネット等で検索できる情報検索システムの拡充や利用者用コンピュータの設置など、さらなる情報化が図られるよう働きかけます。

(オ) 公立図書館間の協力等の推進

- a 県立図書館において、巡回協力車による資料や情報の提供、レファレンスの援助、司書の研修等を通じて、市町立図書館の児童サービスを支援します。
- b 県立図書館は、市町立図書館相互の協力体制を支援するシステムを整備し、市町立図書館間の情報交換や相互貸借の円滑化に努めます。

(カ) 全域サービスの推進

市町立図書館に対して、分館・サービスポイント^{☆1}の設置やBM^{☆2}（移動図書館車）の運行等により域内全域で読書環境の充実が図られるよう促します。

(キ) 地域の読書活動への支援

市町立図書館の行う児童館等や地域で行われる読書活動への支援や、病院等における入院児童等に対する支援を促すとともに、県立図書館は資料の貸出しや助言を行うなどし、市町立図書館のそのような活動のバックアップに努めます。

(ク) 学校等の読書活動への支援

県内の学校・幼稚園・保育所等で行われる読書活動や学校図書館活用に対して、市町立図書館による支援を促すとともに、県立図書館は、保有する学校図書館支援専用図書をはじめとした豊富な蔵書の貸出しや司書による助言などにより、その取組をバックアップします。

また、学校・幼稚園・保育所などで読書活動に関わる人を対象に、子ども読書や学校図書館支援に関する情報の発信を行うことで、その活動を支援します。

(2) 児童館や公民館等における子どもの読書活動の推進

児童館や公民館等の役割

児童館や公民館、コミュニティセンター等は、地域住民の学習活動や子どもの健やかな成長を目的とした誰もが利用できる施設であり、子どもの読書活動推進の一翼を担うことが期待されず。

これらの施設では、子どもが本と出会い親しむことができる場所となるよう、環境整備に努めるとともに、読書活動の普及・啓発に努めていくことが求められます。

現状と課題

■ 児童館は、子どもの健全な遊びを支援し、その健康を増進し、また情操を豊かにすることを目的とした児童福祉法に基づく児童厚生施設であり、図書室の設置が義務付けられています。

■ その図書室は、地域の身近な読書活動の支援の場になっており、絵本等の児童図書の貸出しやそれらを活用した様々な活動が行われ、読み聞かせやおはなし会などの活動は、子どもが読書に親しむ契機になっています。

■ 子どもの読書活動を推進する上で、児童館には、図書室を気軽に活用でき、子どもにとって身近に感じられる読書施設としていくことが求められます。

☆1 「サービスポイント」：市民が図書館サービスを受けることができる施設。

☆2 「BM」：BOOK MOBILE（ブックモバイル）の略。自動車文庫や移動図書館車等と訳される。学校・幼稚園・保育所等や図書館から遠方にある地域等に図書館の本を搭載した自動車で出かけ、その場で貸出・返却を行う。

■ 地域での活動や交流の拠点である公民館やコミュニティセンターでは、子育てサロンなど保護者を対象にした講座の開催や、ボランティアによる読み聞かせ会等が行われています。

■ 公民館やコミュニティセンターには、その事業等を通して子どもの読書活動に対する理解を深めるとともに、公立図書館とも連携しながら、ボランティアによる読み聞かせ会等、地域住民による子どもと本をむすぶ様々な活動の場を提供することにより、地域の子どもの読書活動を推進することが期待されます。

施策の方向

ア 子どもが読書に親しむ機会の提供

(ア) 子どもが読書に親しむ機会を提供し、子どもの読書への興味・関心を高めるため、保護者や地域のボランティアによる読み聞かせやおはなし会などの活動が推進されるよう促します。

(イ) 読み聞かせやおはなし会等においては、関連図書の展示などにより、子どもの本に対する興味を広げられるような活動を、公立図書館と連携して行えるような工夫を促します。

イ 読書環境の整備・充実

(ア) 図書を気軽に閲覧できるような配慮、希望図書の貸出しの実施など、子どもが気軽に読書に親しむことができるような環境づくりを促します。

(イ) 蔵書の整備を図り、子どもが親しめるよう配架の方法を工夫するなど、図書室の充実を促します。

ウ 職員等の知識・技術の向上

職員等の読み聞かせ等の知識・技術の習得あるいはその向上を目的とした講習会や研修会への積極的な参加を促します。

(3) 文庫活動や読み聞かせボランティアなどによる子どもの読書活動の推進

文庫活動や読み聞かせボランティアの役割

地域の文庫活動や読み聞かせボランティアは、学校・図書館・公民館等と連携しながら子どもの読書活動の推進に関する理解や関心を深めたり、子どもが読書に親しむ機会を提供したりするなど、子どもの読書活動を推進する上で大きな役割を果たすことが期待されます。

現状と課題

■ 文庫活動や読み聞かせボランティアなどは、子どもの読書活動の推進に関する理解や関心を広めるとともに、子どもが読書に親しむ様々な機会を提供するなど、子どもの自主的な読書活動を推進することに大きく寄与しています。

■ 子どもの読書活動の重要性の理解や読み聞かせ等の技術の向上のために、ボランティアを対象

とした研修の機会を継続的に設けることが重要です。

■ 平成25年度に行った調査（「読書活動団体等の調査」県教委生涯学習課）では、子どもを対象とした読書関係のボランティア活動を行っている団体が387団体、会員が4,903人であったのが、平成29年度に行った同調査では、408団体、4,868人となりました。ボランティア養成講座や様々な子ども読書活動推進の取組により、より一層、身近な地域で文庫活動や読み聞かせ等が行われる環境づくりが進んでいますが、新しくボランティア活動を始める人が少なくなっています。

■ 「図書館法」や「図書館の設置及び運営に関する望ましい基準」では、ボランティア活動の機会や場所を提供することが定められています。

■ 文庫活動や読み聞かせボランティアなどが主体性を持ちつつ、相互に連携・協力を図ることは、それぞれの団体の活動内容を充実させるとともに、県全体の子どもの読書活動の一層の推進に資することになることから、文庫活動や読み聞かせボランティアなどの団体間の連携・協力が図られることが望まれます。

施策の方向

ア 読書ボランティア（リーダー）の養成

文庫活動や読み聞かせなどの活動の一層の充実を図るため、活動を行っている人や、これから活動をしたいと考えている人を対象にした養成講座やスキルアップ講座の開催を推進します。

また、読書ボランティアが集まり、互いに連携して活動の情報や実践を交流し合う機会を提供します。

イ 情報の収集・提供

文庫活動や読み聞かせボランティアなどの活動を支援するため、「におねっと」上のサイト「子ども読書活動支援センター」により、県内の文庫活動や読み聞かせボランティアなどに関する情報をはじめ、子ども読書活動に関わる情報を収集・提供することにより、各地域での活動の充実を促します。

ウ 学校、図書館等との連携等ボランティア活動の場の提供

モデル的な実践事例の紹介などにより、文庫活動や読み聞かせボランティアなどと学校、図書館等との連携・協力を促進します。

特に市町立図書館においては、読み聞かせ等の読書ボランティア活動と連携して、ボランティア活動の機会や場所が提供されるよう促します。

県や関係団体が行う子どもを対象とした催しの際、図書館やボランティアと連携したおはなし会等子ども読書に関する行事が行われるよう情報提供や調整に努めます。

エ 国や民間の助成の活用

国の民間団体に対する支援策である「子どもゆめ基金」や民間の子ども読書活動への助成等の周知に努め、その活用を奨励することにより、子どもの読書活動を推進する活動の充実を促しま

す。

(4) 関連機関・団体等との連携による子どもの読書活動の推進

関連機関等の役割

青少年団体等の関係団体、保健センター等の関係機関なども、子どもの読書活動に関する理解や関心を深めるとともに、子どもが本に親しむ様々な機会を提供するなど、子どもの読書活動を推進する上で大きな役割を果たすことが期待されます。

民間企業においては、地域と連携した活動の際、店舗のスペースをおはなし会等に提供することなどが期待されます。

現状と課題

■ 県の関連団体が主催するイベント等に読書ボランティアが公立図書館と連携しておはなし会等を行う機会が増えてきています。

■ 地域で行われるイベント等で、民間企業の店舗やスペースを利用して、読書ボランティアと各種の団体等が連携した子ども読書関連の企画が実施される事例があります。

■ 公共図書館および児童館・公民館、読書ボランティア等による様々な取組によって、地域における子どもの読書活動の推進が図られてきましたが、さらに子どもの読書環境を整備・推進するために、関連団体や民間企業などいろいろな分野の機関との連携が進められ、活動の場の拡大を図ることが期待されます。

施策の方向

ア 子どもが集まるところに本がある環境づくり

子どもの身近なところに本がある環境づくりを推進するために、図書館の団体貸出制度の活用や文庫活動等との連携により、絵本や児童書が設置されるような取組を促します。

また、子ども会や自治会、放課後子ども教室や放課後児童クラブ、さらには地域の企業や子ども食堂などの様々な主体との連携を通じて、子どもが集まるところでおはなし会等の読書活動が行われるような工夫を促します。

イ 関係機関とのネットワークの強化

保健・福祉部局との連携により、乳幼児健診時に保護者向けの子ども読書啓発冊子を手渡してきており、こうした機会にあわせて関係機関・団体との連携によるブックスタート等の事業を実施するなど、啓発方法の工夫を働きかけます。

また、(公財)びわ湖芸術文化財団等関連団体と連携し、様々な事業の中に子ども読書関連の催しを出展するなど、子どもが読書にふれる機会を増やします。

ウ 民間企業との連携

滋賀県家庭教育協力企業協定制度（しがふぁみ）加盟の企業・事業所等との連携を進め、子ども読書の啓発チラシ等の情報提供をすることにより、働く大人たちや子育て期の保護者層に子ども読書活動の重要性についての理解を促進します。

4 学校等における子どもの読書活動の推進

学校等の役割

幼稚園・保育所・認定こども園は、幼児期に、絵本の読み聞かせなどにより、本に親しみ、楽しさを覚える機会を提供するなど、その後の読書活動の基礎を築く、大切な役割を果たしています。

また、学校では、従来から国語科などの各教科等における学習活動を通じて読書活動が行われており、子どもの読書習慣を形成していく上で大きな役割を担ってきました。また学校図書館は、すべての学校に設置が義務付けられており、子どもたちにとって最も身近な図書館です。

平成29年・30年に公示された学習指導要領においては、言語能力育成を目的として、各教科の特質に応じた言語活動を進めるとともに、学校図書館の計画的な利活用を通じて、児童生徒の自主的・自発的な読書活動の充実を図ることとしています。その際、学校図書館には「主体的・対話的で深い学び」の推進を効果的に進める基盤としての役割が求められており、学校図書館や読書活動の位置づけはますます重要なものになっています。また、平成28年には、学校図書館の運営上の重要な事項について、その望ましい基準を示す、「学校図書館ガイドライン」が策定されました。

そこで、学校図書館の「読書センター」^{☆1}や「学習センター」^{☆2}「情報センター」^{☆3}という役割を再認識し、それらの機能を活用した授業のあり方をより一層工夫するとともに、すべての教育活動を通じて児童生徒が楽しみながら自主的に読書に親しむことのできるようにすることが大切です。

そのためには、学校図書館の年間運営計画を立て、その機能を活用する学習指導、読書指導等に協力するなど、学校図書館の運営・活用に中心的な役割を担う司書教諭と、資料の紹介、提供、情報サービス、広報、資料整備等実際の学校図書館サービスを専ら担う学校司書の配置は不可欠です。

司書教諭や学校司書が核となって学校図書館を運営し、教員と連携して全校的な読書活動を意図的・計画的に実施すること、公立図書館と連携したり読書ボランティアの協力を求めたりすることによって多様な読書活動を展開すること、保護者に呼びかけ家庭における読書習慣を確立することなどが求められています。

☆1 「読書センター」：学校図書館が、日々の生活の中で児童生徒が読書を楽しむ場であり、また豊かな感性や情操を育む読書指導の場としての機能を果たすこと。

☆2 「学習センター」：学校図書館が、児童生徒の主体的な学習活動を支援する場であり、授業の内容を豊かにしてその理解を深める機能を果たすこと。

☆3 「情報センター」：学校図書館が、児童生徒や教職員の情報ニーズに対応したり、児童生徒の情報の収集・選択・活用能力を育成したりする機能を果たすこと。

(1) 幼稚園・保育所・認定こども園における子どもの読書活動の推進

現状と課題

- 乳幼児期に、言葉や絵本にふれる機会を増やし、本に親しんでその楽しさを覚えることは、その後の読書活動の基礎となります。
- 幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、「言葉」の領域に「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」ことが求められています。
- 幼稚園・保育所・認定こども園では、絵本の読み聞かせ、紙芝居、パネルシアター^{☆1}等を随時行うなど、おはなしに対する子どもたちの興味をはぐくみ、読書活動へ広げる活動が展開されています。おはなしを始めようとする、本のもとへ集まり、目をきらきらさせて待つ子どもたちの姿が見られます。
- 教員や保育士、保育教諭が乳幼児期における絵本等との出会いの重要性をより深く理解し、乳幼児が気軽に絵本や物語等にふれあえる環境づくりに工夫を凝らしたり、公立図書館やボランティア等との連携・協力による読み聞かせなどをしたりすることによって、一人ひとりの子どもの言葉に対する感覚が養われるように努める必要があります。
- 親子で絵本を楽しむ時間を家庭でも持てるよう、保護者を対象とした講習会や情報交換の場を設けて読書の重要性に対する啓発を図ること、家庭に対する絵本の紹介や貸出しを行うことなどが期待されます。

施策の方向

ア 絵本等に親しむ機会の提供

- (ア) 指導計画において、発達の段階に即した絵本等の活用を盛り込むよう働きかけ、乳幼児が絵本や物語、紙芝居等に一層親しむ機会を確保するよう促すとともに、近隣の小・中・高等学校との異年齢交流の中で、上学年児童生徒が読み聞かせ等を行うことなどにより、乳幼児の絵本等にふれる機会が多様になるような工夫を促します。
- (イ) 幼稚園・保育所・認定こども園での読み聞かせに未就園児や保護者などにも参加してもらうなど、子育て支援の中で保護者の理解を深めながら、乳幼児が絵本等をより楽しめるような工夫を促します。
- (ウ) 保護者の理解を深め、家庭での読み聞かせ等の活動が進むよう、絵本等との出会いの重要性を家庭にも伝えたり、保護者やボランティア等の協力を得て、絵本の読み聞かせや紙芝居の実演等の開催、絵本の貸出しをすることなどを通して、家庭との連携を密にするよう促します。

☆1 「パネルシアター」：毛羽立ちのよい布を張ったパネルを置き、不織布で作った絵や人形をそのパネルの上にくっつけたり、動かしたりしながら、話の内容に沿った場面を構成し演じる、動く紙芝居のようなもの。

イ 資料・設備の整備・充実

乳幼児が主体的に絵本や物語に親しんでいけるような、興味・関心、発達等に応じた絵本等を整備するとともに、乳幼児が自ら手にとって本に親しめ、落ち着いてじっくりと見ることができる図書スペースを設置するなどの環境づくりを促します。

ウ 教員・保育士等の理解や技能の向上

乳幼児が絵本や物語などに親しむ活動を積極的に行うよう、県教育委員会が開催する子どもの読書学習講座や各市町で開催される講習会や研修会への積極的な参加を促し、研修等を通じて教員や保育士の理解や技能を高めるように努めます。

エ 公立図書館やボランティア等との連携

公立図書館等との連携により、子どもの発達に応じた図書を選定し、幼稚園・保育所・認定こども園での利用に供せられるようにその紹介に努めます。

また、公立図書館やボランティア等との連携を図るために、連絡会等の開催を促進します。

(2) 小中学校における子どもの読書活動の推進

ア 児童生徒の読書習慣の確立・読書指導の充実

現状と課題

■ 第3次計画期間中の指標の推移を見ると、全校一斉の読書活動の普及などにより本県の児童生徒の読書率は高い値を示していますが、学校の授業以外で平日に継続的に読書している児童生徒の割合は全国平均と比べて低く、自主的な読書習慣の定着に課題があると考えられます。

■ 全校一斉の読書活動は、それまで日常的に読書に親しんで来なかった児童にも一定時間本に接する機会を設けることができるため、すべての子どもに読書の習慣付けを図るうえで有効な取組といえます。また、朝の読書活動の取組は、落ち着いた雰囲気でのスタートを迎えられるという効果があり、学校生活のリズムづくりという観点からも推進されていますが、子どもが楽しみながら自主的に行う読書活動につながるよう工夫していくことが重要です。さらに、一斉読書活動が学校・学級・学年によって取組の度合いに大きな違いが出ることをないように、発達の段階に応じた読書が系統的に行われるような指導計画を作成するなど、読書活動の意義について全教職員の意識を高めていく必要があります。

■ 一斉読書活動以外にも、読み聞かせやブックトーク、推薦図書コーナーの設置などを実施している学校があります。子どもたちの読書に対する興味・関心を高めるために、一斉読書とあわせて、これらの取組を継続していくことが必要です。「友だちにすすめたい私の好きな本」、「〇〇先生がすすめる本」、「図書委員会による選書100」といったブックリストを用意し、それらの本がいつでも手に取れるようにしておくことも有効な取組です。

■ 各教科等の指導計画に読書活動を組み込んだり、学校図書館や公立図書館から借り出した図書

等を活用した授業を行ったりするなど、様々な学習活動で読書活動が展開される工夫もなされています。今後も、これらの取組を着実に積み重ねていくことが大切です。

施策の方向

(ア) 学校の体制づくり

a 学校全体で取り組む学校図書館の整備・充実と読書活動の推進

すべての教職員が学校図書館の機能を活用した授業や取組を行えるようにするために、図書資料の充実や蔵書のデータベース化等の環境整備を進め、図書館運営委員会等校内組織の充実を図るとともに、学校図書館の活用に関する校内研修を実施したり校外研修への参加を促進したりします。

b 図書館教育全体計画の見直し、年間指導計画の充実

長期的なビジョンに立ち、教育目標の実現に寄与し子どもの読書活動や学習に役立つ学校図書館づくりを学校の教育計画に位置づけること、各教科等の年間指導計画に学校図書館の活用や読書活動の推進を位置づけることを促進します。

また、司書教諭や学校司書等が核となって、学校図書館を活用した授業改善の方策や実践に取り組むように努め、優れた実践事例を紹介することにより学校図書館の活用の普及・啓発に努めます。

c 読書活動の充実に向けた指導と助言

担当指導主事による学校訪問の際には、学校図書館に関する状況を把握するとともに、読書活動の推進についての指導と助言を行います。

(イ) 読書指導の充実

a 指導計画への位置づけ

各教科等の指導計画に学校図書館の計画的な利用やその機能の活用を図り、児童生徒の主体的、意欲的な学習活動や読書活動ができるよう推進します。

b 自主的な読書習慣の形成につながる取組の実施

児童生徒の読書に親しむ態度を育成し、読書習慣を形成することが大切であり、学校をあげての取組として、朝の読書活動をはじめとする全校一斉読書や読み聞かせ・ブックトーク等の取組の一層の普及に努めます。その際、自主的な読書習慣の形成という取組の趣旨に十分に留意するとともに、児童生徒による主体的な取組である図書委員会活動なども活かしながら、友人同士で本をすすめるなど、子どもの興味・関心を高め、新たな本との出会いを作る取組を進めます。

あわせて、地域や保護者のボランティアによる読み聞かせなどとも積極的に連携して進めます。

c 特別な支援を要する児童生徒の読書活動の充実

障害の種類や程度、発達の段階に応じ、一人ひとりの興味・関心を喚起することができるように、読み聞かせなどに取り組み、学習の場や日常生活で本にふれる機会を多く設定するよう努めます。

d 推薦図書等の選定

しが子ども読書活動推進協議会と連携して作成する子どもの発達の段階に応じた啓発冊子等を活用したり、学校が子どもの実態に応じて独自に推薦図書等を選定したりして、読書への啓発に努めます。

e 先進的な取組の紹介

4月23日を含む読書活動期間の設定など、多くの学校で「子ども読書の日」にかかる取組を行っているところです。そうした取組事例や子どもの読書活動優秀実践校の実践事例など、小・中学校を含めた優れた実践事例を紹介することにより、各学校で多様な読書活動が展開されるように努めます。

イ 学校図書館の整備・充実

現状と課題

■ 学校における「読書センター」や「学習センター」、「情報センター」として、学校図書館は極めて重要な役割を果たします。

■ 子どもの読書活動を多面的に進めたり、各教科等で学校図書館の機能を活用した学習活動を展開したりするためには、それに応えることのできる図書資料の整備および人的配置が第一に求められます。

■ 本県では、学校図書館を活用した授業の頻度や学校司書等の配置率が全国平均を下回る状況が長く続いたことから、県では市町の小中学校の環境整備と授業での活用を普及するための取組として、平成27年度から29年度にかけて「学校図書館活用支援事業」を行いました。

本事業では、地域の公立図書館やボランティアの協力を得ながら、学校図書館のレイアウトの変更や不要図書の除籍、わかりやすい配架等を行い、使いやすい図書館をつくる「学校図書館リニューアル」を実施するとともに、平成29年度にはそのノウハウをまとめたマニュアルを作成し、広く県内に周知しました。

■ この事業を通じて学校図書館や学校司書の重要性に関する理解の促進を図り、資料整備・人的配置両面で、特に小学校において一定の改善はされましたが、まだ十分とは言えません。

■ 学校図書館法では12学級以上の学校に司書教諭を配置しなければならないこと、学校には学校司書を置くよう努めなければならないこと、国および地方公共団体は学校司書の資質向上を図るための措置を講ずるよう努めなければならないことが規定されています。

■ 子どもが読書習慣を身につけ、より多くの魅力的な本とめぐり会うことができるよう、最も身近な読書施設である学校図書館の資料整備と11学級以下の学校への司書教諭の発令、司書教諭の授業時間数を軽減するなどの負担を減らすこと、および、学校司書の配置を進めていくことが必要です。

■ 平成28年11月に策定された「学校図書館ガイドライン」では、学校図書館のさらなる整備充実を図るため、学校図書館の運営上の重要な事項について示されています。このガイドラインを参考とし、学校図書館の整備充実を図ることが望まれます。

■ 平成29年度からの国の学校図書館関係の財政措置では、「学校図書館図書整備5か年計画」

による図書資料の整備および新聞の配備のための措置とならんで、学校司書の配置のための財政措置もなされています。これらの積極的な活用により、学校図書館の蔵書を魅力あるものに整備し、学校司書を配置して、学校図書館の利用が促進されるようにすることが求められます。

■ 司書教諭や学校司書の役割についての理解促進や資質の向上を図るための研修や優れた取り組みの実践を広め、共有する場をさらに拡充していく必要があります。

■ 司書教諭や学校司書等が活動の中心となって計画的な学校図書館の運営やサービスの改善・充実を行うとともに、学校図書館を使った探究学習等授業への活用や多様な読書活動を実施していくことが必要です。

■ 蔵書のデータベース化は進んでいますが、まだ未実施の学校もあります。業務の効率化のため、学校図書館の情報化を図ることが望まれます。

施策の方向

(ア) 資料・設備の充実

a 国の施策等に基づいた学校図書館の整備

「学校図書館ガイドライン」を参考にし、学校図書館の適切な運営や利活用などが行えるよう働きかけます。特に蔵書の整備については「学校図書館図書標準」^{☆1}の達成を実現するために、国の学校図書館図書整備5か年計画による地方交付税措置も活用して必要な予算措置を講じ、図書資料の整備・充実に努めるとともに、内容が古くなり、利用価値が乏しくなった図書等については、より利用価値の高い図書に更新するなど、図書資料の選択と整理を計画的にすすめられるよう、市町に対して働きかけます。

b 図書資料等の充実

しが子ども読書活動推進協議会と連携して作成する啓発冊子等の活用を図るとともに、学校独自で読みたくなる本や学習に役立つ本を中心に自校の児童生徒に必要な図書を選定し、計画的な図書資料等の充実を促します。

c 施設・設備の整備・充実

子どもたちが、行きたくなる、本が読みたくなる学校図書館になるように施設・設備の充実を促すとともに、開館時間を確保するなど、常に本を手にとることができる読書環境づくりの工夫に努めます。その際、「学校図書館リニューアル」の取組について、県で作成した学校図書館活用マニュアルの普及や、具体的取組事例、その効果などの周知により、自主的な実施を働きかけます。また、リニューアル後の学校図書館において、子どもの読書に対する興味・関心を引く様々な取組や探究学習等の授業への活用が行われるよう促します。

☆1 「学校図書館図書標準」：公立義務教育諸学校において、学校図書館の図書の整備を図る際の目標として、文部省（平成5年当時）が定めた学校種・学校規模別（学級数）の蔵書冊数。

d 授業での利活用

新学習指導要領等を踏まえ、子どもたちの主体的・対話的で深い学びに対応できるよう、学校図書館の機能を活用した授業を学校全体として計画の中に組み込み、継続的に実施できるように働きかけます。また、教職員や学校司書との間で、授業内容や利用した図書のリストなどを共有し、より円滑な授業準備や深みのある授業ができるよう促します。

e 学校図書館の情報化

学校図書館の情報化を図るため、学校図書館へのコンピュータ整備および蔵書のデータベース化を働きかけます。

(イ) 学校図書館の活用を充実していくための人的配置の推進

a 司書教諭の位置づけの明確化

司書教諭は、学校図書館の専門的な仕事を行う教員として、学校図書館の運営や活用について中心的な役割を担っています。学校図書館の運営にあたっては、学校図書館長としての役割も担う校長のリーダーシップのもと、司書教諭が職責を十分に果たすことができるよう、その役割等について理解を図り、教職員の協力体制を確立させます。

b 司書教諭の配置促進

司書教諭は、平成28年度の調査では12学級以上の全ての学校で配置されていますが、11学級以下の学校においても司書教諭が配置できるよう学校図書館にかかわる人づくりに努めます。

c 学校司書の配置促進

学校図書館活動の充実を図る上で、学校司書の果たす役割の重要性を普及・啓発するとともに、国の財政措置や県内外各地の先進的な取組を紹介し、これらの積極的な活用等により、市町の小中学校への学校司書の配置を促進します。

d 学校司書と司書教諭をはじめとする全教職員の連携促進

小・中学校に配置されている学校司書は、学校図書館の運営や図書資料の収集、管理など、学級担任と兼務することの多い司書教諭と連携・協力して、学校図書館の効果的な活用を図っています。全ての教職員が、各教科等において学校図書館の機能を計画的に利用できるよう、学校司書と、司書教諭をはじめとする全教職員との連携促進に努めます。

また、各学校等におけるこのような取組を紹介するとともに、小・中学校において学校図書館の諸業務を担う人員配置に工夫が図られるよう働きかけ、学校図書館の活用を促します。

e 研修等の充実

(a) 司書教諭等連絡協議会や子ども読書学習講座等において、学校図書館の活用や運営等に関して積極的な情報交換を行ったり、子どもの読書への理解や読み聞かせの実技の習得を促進することにより、司書教諭をはじめとする学校関係者の資質の向上と意識の高揚を図ります。

(b) 学校司書の資質の向上を図るため、学校司書の重要性についての理解を広げ、研修の機会の充実を図ります。また、学校図書館関係者が広く参加する研修等を実施し、業務

の相互理解や連携を進めます。

ウ 家庭・地域との連携による読書活動の推進

現状と課題

■ 第3次計画期間中に学校と公立図書館の連携の推進を行ったことにより、資料の貸出しを中心として、小中学校と公立図書館の連携が進みました。子どもたちの読書活動の充実のため、引き続き連携を深めていく必要があります。

■ 平成28年度の「学校図書館の現状に関する調査」では、「ボランティア等の協力を得ている」公立小学校は87.0%、公立中学校は42.4%ありました。読み聞かせボランティアや保護者に、読み聞かせや紙芝居・ブックトークといった読書にかかわる活動や、学校図書館の整備作業等に関わっていただくことは、子どもたちの読書活動に厚みを増すことにつながります。

■ 県内各地で保護者をはじめ地域住民、企業、団体などにより、学校の環境整備や教科等の指導支援など、学校を支援する様々な取組が広がっています。この仕組みを利用した地域の人材による学校図書館への支援が期待されます。

施策の方向

(ア) 公立図書館との連携

a 授業や読書指導における連携

公立図書館の司書による学校での読み聞かせやブックトークの実演、読書活動や学習活動成果物等の展示会の公立図書館での開催等、公立図書館と連携した多様な読書活動が展開されるよう、学校図書館と公立図書館との連絡会等により連携が図られるよう促します。

b 学校図書館の運営における連携

(a) 学校図書館の運営に関して、サービスの改善や利用促進を図るため、司書教諭や学校司書が公立図書館の司書との連携を進めるよう促します。

(b) 学校図書館が公立図書館の蔵書を利用して読書活動を行えるよう、県立図書館と市町立図書館間の協力体制を強化します。

c 連携体制の推進

公立図書館や地域のボランティアによる、学校や学校図書館運営の支援を進めるために、県内でモデルとなる取組を実践している地域の情報を集め、その事例を広く紹介し、連携や協働に向けた学校図書館関係者の意識の醸成を図ります。

(イ) 家庭との連携

読書活動を取り入れた授業の公開等により、学校における読書活動の様子を家庭に知らせるよう促します。

また、家庭における読書習慣の確立に向け、学校だより等を活用した読書のすすめ、家庭との連携による読書活動や親子読書会などの取組を促進します。

(ウ) 地域のボランティア等との連携

- a 読み聞かせボランティアや地域の人材の協力によるおはなし会等の場づくりを促進し、学校を中心とした地域に広がる読書活動の呼びかけを行います。
- b 学校教諭等を対象とした図書館の活用方法、ボランティアとの連携方策、読み聞かせの手法などを学習する講座の開催を通して、読み聞かせボランティアや公立図書館との連携を促進します。
- c 学校図書館の図書展示やディスプレイ、また読み聞かせ会やブックトーク等を地域のボランティア等と連携して実施できるよう促します。
- d 地域連携担当者等を窓口として、地域の人材による学校での読書活動支援等の取組が推進されるよう働きかけます。

(3) 高等学校における子どもの読書活動の推進

現状と課題

■ 第3次計画期間中の指標の推移を見ると、全国的な傾向と同様に、学校段階が進むにつれて読書率は低下し、高校生の値は小中学生より大幅に低くなっています。

■ 部活動等の課外活動や家庭学習の時間が大幅に増加し、時間的余裕が少なくなると同時に、様々な活動や娯楽への興味も広がり、読書への関心が薄れると考えられます。

■ 平成29年3月の「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」（文部科学省委託調査）によると、高校生になってから本を「ほとんど読まなかった」「あまり読まなかった」と回答した者に理由を尋ねた場合、多い回答は「他の活動等で時間がなかったから」64.5%、「他にしたいことがあったから」47.3%、「ふだんから本を読まないから」32.8%となっています。

■ 高校生の自主的な読書活動を推進するためには、少しの時間でも本にふれる機会を設けるほか、本を読みたくなるような情報を提供すること、生徒の幅広い関心に対応できる豊富で多様な本が身近にあることが重要になってきます。

■ 新しい高等学校学習指導要領においては、各教科の言語活動を充実させることが求められています。学校図書館を計画的に利活用した学習活動の展開を通じて生徒の主体的・対話的で深い学びを実践することが期待されます。

■ 「学校図書館の現状に関する調査」における学校図書館の整備状況を見ると、学校司書は全ての県立高等学校に配置されています。また、司書教諭については、12学級以上の学校の司書教諭の発令状況は100%、11学級以下の学校については37.5%となっています。

■ 学校における読書指導や教科指導における学校図書館の利用を計画的に行うために、11学級以下の学校にも司書教諭を配置し、学校司書と連携を取りながら学校図書館の活用促進に取り組むことが必要です。

■ 1校の学校図書館で対応できない図書資料への要求に対応するには、学校図書館相互の協力体制が不可欠です。これらの必要に対応するため県立高校の学校図書館の蔵書情報の共有化や相互利用を図ることが求められます。

■ 公立図書館は、学校図書館の求めに応じて資料の貸出し等の物的支援や学校に出向いてのブックトーク等の人的支援を行うことが期待されます。

施策の方向

ア 読書指導の充実

(ア) 読書への関心を高める取組

感性を磨き、思考力や表現力をはぐくみ、学力を支える基盤となる読書活動の推進に取り組むことは重要であり、学校における読書週間にあわせた一斉読書等により、本にふれる機会を設けるほか、司書等によるブックトークの実施や教職員による本の紹介、ビブリオバトルや同世代が選ぶ書評コンクール等の取組によって本への興味を引き出し、高校生の自主的な読書活動の推進を図ります。

さらに、書評コンクールの成果の活用や、学校独自の図書リスト等により、高校生に対して本に関する情報の提供を行います。

(イ) 授業等での言語活動

言語活動を充実させた授業づくりを推進するため、学校図書館において、教室で学んだことを確かめ、広げ、深める学習活動を展開するとともに、課題を設定し、その課題を解決するために必要な図書資料から情報を収集、整理・分析し、自分の考えをまとめて発表するなど、生徒の主体的な探究的学習を支援するよう努めます。

また、これらの学習を展開する際に必要となるスキル（「課題設定の仕方」「資料からの情報の探し方」「情報の整理の仕方」「資料へのまとめ方」など）を、学校図書館を活用する中で生徒に身に付けさせるよう努めます。

イ 学校図書館の整備・充実

(ア) 司書教諭の位置づけの明確化

司書教諭は、学校図書館の専門的な仕事を行う教員として、学校図書館の運営や活用について中心的な役割を担っています。学校図書館の運営にあたっては、学校図書館長としての役割も担う校長のリーダーシップのもと、司書教諭が職責を十分に果たすことができるよう、その役割等について理解を図り、教職員の協力体制を確立させます。

(イ) 司書教諭の配置促進

1 1 学級以下の高等学校についても、司書教諭が配置できるよう学校図書館にかかわる人づくりに努め、学校司書との協力・連携による学校図書館の計画的な運営が行われる環境整備を図ります。

(ウ) 学校司書と司書教諭をはじめとする全教職員の連携促進

学校司書は、司書教諭と連携・協力して学校図書館の運営を進めるとともに、図書資料の管理をはじめ諸事務の処理等にあたっています。今後も、読書活動や授業での利活用において、学校図書館の活用をさらに充実するため、学校司書と司書教諭をはじめとする全教職員の連携促進に努めるとともに、研修の充実等司書の資質向上を図ります。

(エ) 研修等の充実

司書教諭等連絡協議会や子ども読書学習講座等において、学校図書館の活用や運営等に関して積極的な情報交換を行ったり、子どもの読書への理解や読み聞かせの実技の習得を図ることにより司書教諭をはじめとする学校関係者の資質の向上と意識の高揚を図ります。

(オ) 図書資料等の充実

県立高校において、学校図書館機能をさらに充実させることをめざして、図書資料の整備・充実を継続的に進めます。また、特別な支援を要する生徒の状況に応じた多様な資料の提供や、誰もが使いやすい図書館の環境整備の推進に努めます。

(カ) 学校図書館間の協力等の推進

すべての県立高校において、蔵書のデータベース化を進めるとともに、県立高校の学校図書館がそれぞれの蔵書を必要に応じて相互利用できる協力体制の仕組みを検討します。

ウ 公立図書館やボランティア等との連携

(ア) 授業や読書指導における連携

公立図書館の団体貸出制度等を利用した資料提供や、司書やボランティアによるブックトーク・読み聞かせなどの活動を公立図書館と協力して行うように努めます。あわせて、公立図書館の利活用について広報することなどにより、公立図書館の利用促進を図ります。

(イ) 連携体制の促進

学校司書と公立図書館の司書が学校と公立図書館の連携等について情報交換や協議を行うことなどにより、相互理解と連携促進に努めます。

(4) 特別支援学校における子どもの読書活動の推進

現状と課題

- 当県の特別支援学校における児童生徒の不読率は平成29年度48.3%でした。
- 障害のある子どもに対しては、一人ひとりの障害の種類や程度、発達の段階に応じた指導を行うことが重要であり、全員一斉の読書活動の時間を設けることが難しい場合もあります。
- 一人ひとりが読書の楽しさにふれることができるように、豊かな読書活動を体験できる教育活動を工夫したり、日常生活の中で本とふれあう機会を設けたりする必要があります。
- 蔵書のデータベース化を一層推進し、そうしたことで得られる情報を活用して様々な障害や発達段階に応じた魅力的な図書資料等の充実に努めるなど、子どもが本との出会いを果たすにふさわしい環境を整備することも求められています。
- 情報通信技術の進展にともない、電子書籍やデジタル図書をスマートフォンやタブレット端末で利用できる環境が身近になってきています。紙の本や絵本を読むことが困難な子どもに対する読書活動へのはたらきかけにはこれらの利用が有効な場合があります。
- 視覚障害者用の点字や録音図書のデータベースの構築が進んでいます。学校等においてこれらを活用することで視覚障害のある児童生徒の読書活動の推進を図ることができます。

- 読書活動の意義について教職員の意識を高める研修等に取り組む必要があります。

施策の方向

ア 児童生徒の読書活動の充実

- (ア) 一人ひとりの興味・関心を喚起することができるように、読み聞かせやパネルシアター等に取り組み、学習の場や日常生活で本にふれる機会を多く設定するよう努めます。
- (イ) 「学校だより」等を通じて読書の重要性を家庭に呼びかけ、子どもの実態とニーズに応じた読書活動が保護者とともに行われるように促します。

イ 学校図書館の整備・充実

- (ア) 障害のある子どもが豊かな読書活動を体験することができるよう、子どもの様々な障害の種類や程度に対応できる選書に努めます。
- (イ) 学校図書館と公立図書館の連携を図り、団体貸出等により障害のある子どもにとって障害の状況に応じた読書環境の充実に努めます。
- (ウ) 「特別支援教育教材ポータルサイト」^{☆1}の活用などにより、障害のある児童生徒の読書環境の充実に努めます。

ウ 教職員の専門性の向上

- (ア) 学校図書館の運営にあたっては、学校図書館長としての役割も担う校長のリーダーシップのもと、司書教諭が職責を十分に果たすことができるよう、その役割等について理解を図り、教職員の協力体制を確立させます。また、11学級以下の学校についても、司書教諭が配置できるよう学校図書館にかかわる人づくりに努め、学校司書との協力・連携による学校図書館の計画的な運営が行われる環境整備を図ります。
- (イ) 障害の種類や程度、発達の段階に応じた読書活動や読書環境の工夫など、優れた実践事例の交流や紹介等により、読書活動推進に関する教職員の意識を高めます。
- (ウ) 専門的な理解や技能を得ることができるような講習会や研修会への参加を促進するとともに、その内容について周知する体制づくりに努めます。

エ 公立図書館との連携

墨字^{☆2}による読書が困難な子どもの保護者に対して、県立図書館が加入しているサピエ図書館サービス等を広報し、点訳や音訳等の資料による読書環境の充実に努めます。

☆1 「特別支援教育教材ポータルサイト」：インターネットにより、障害の状態や特性に応じた教材提供および情報提供を行い、特別支援教育の進展に資するためのシステム。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が運営している。

☆2 「墨字」：視覚障害者の使用する「点字」に対して、通常の印刷による文字や筆記文字の呼称。視覚障害者が墨字の文章を読むためには点訳、音訳などが必要になる。

5 啓発・広報等の推進

現状と課題

- 子どもの読書活動の推進のため、その意義や重要性について県民の理解と関心を深めることが大切であることから、大人も含めて読書活動に対する理解と関心を高められるように国や県、市町、関係機関（団体）との連携・協力による普及・啓発活動が必要となります。
- 子どもの読書活動についての関心と理解を深めるとともに、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高めるため、子どもの読書活動の推進に関する法律において、「子ども読書の日」（4月23日）が設けられ、地方公共団体は、その趣旨にふさわしい事業を実施するよう努めなければならないとされています。
- 文部科学省では、例年、「子ども読書の日」を記念して「子どもの読書活動推進フォーラム」を開催し、子どもが積極的に読書活動を行う意欲を高める活動について特色ある優れた実践を行っている学校、図書館、民間団体および個人に対し表彰を行うことにより、その取組の奨励を図っています。
- 県内の図書館や学校では、「子ども読書の日」を中心におはなし会や絵本の展示会などの関連事業の実施を行っています。
- 県立図書館では、市町立図書館の児童図書関係行事の情報を収集し、県立図書館や生涯学習課のホームページや広報紙を通じて情報提供しています。
- 子どもの読書活動の実態や市町、学校、図書館、文庫活動や読み聞かせボランティア等の取組などに関する情報を収集し、多くの人々がその情報に容易に接し、活用することができるようにすることが求められています。

施策の方向

（1）「子ども読書の日」等における啓発・広報の推進

様々な広報媒体により「子ども読書の日」等の周知に努めるとともに、公立図書館や学校などで「子ども読書の日」等の趣旨にふさわしい行事として、読書活動を取り入れた授業の公開や読み聞かせ等が実施されるよう促します。

（2）子ども読書活動支援センター等による啓発・広報の推進

ア 関係する施設や団体との連携・協力を図ることにより、子どもの読書にかかわる幅広い情報の収集を行い、「におねっと」上のサイト「子ども読書活動支援センター」に掲載することにより、子どもの読書活動に関する様々な情報を提供します。

また、情報通信技術の進展に応じた新しいツールを活用するなど有効な情報提供手段の採用に努めます。

イ 子ども読書啓発冊子の改訂を適宜行い、家庭等への配布や、サイト上での公開で読書案内情報を提供することにより、子どもや保護者の関心と理解を深めます。また、啓発冊子以外にも、効果的な手法により子どもたちに発達段階に応じたおすすめの本を紹介する取

組を進めます。

ウ 子ども読書学習講座等の機会に、子どもの読書活動に関する先進的な実践事例の発表や交流ができる場を提供することにより、関係する機関や団体における活動内容の充実を促進します。

(3) 優れた取組の奨励

国の表彰制度を活用し、子どもの読書活動の優秀実践校、図書館、団体、個人を積極的に推薦することにより、優れた取組を奨励し、関係者の取組の意欲をさらに高め、活動内容の充実を図ります。

また、優れた取組を広く県民に広報し、普及することにより、子どもの読書活動についての関心と理解を深めるよう努めます。

現状と課題

- 本計画の推進にあたっては、関係機関、文庫活動や読み聞かせボランティア、市町等との連携をさらに深め、方策の効果的な推進を図る必要があります。
- 県では、子ども読書活動を総合的に推進するため、学識経験者、民間団体、学校図書館、公立図書館の関係者および関係行政担当者と構成するしが子ども読書活動推進協議会を平成14年度から設置しています。
- 本計画の推進にあたっては、教育委員会内のみならず、庁内部局関係課等と密接な連携を図りながら取り組んでいます。
- 市町においては、それぞれの地域の状況に応じて策定された子ども読書活動推進計画に基づき様々な子どもの読書活動に関する事業が実施されています。国の基本計画および県の推進計画の見直しの状況を踏まえながら、市町の推進計画の点検や評価を行うことが望まれます。

施策の方向**(1) しが子ども読書活動推進協議会の開催等**

- ア しが子ども読書活動推進協議会を定期的に開催し、関係者間の連携・協力のあり方についての意見聴取や情報交換等を行い、その成果を生かしながら方策の効果的な推進に努め、全県的な読書活動の推進をめざします。
- イ 計画の進捗状況について、施策の実施状況を検討・評価するなど適切な進行管理に努めます。

(2) 「子ども読書活動支援センター」の活動

- 子どもの読書活動の推進に関わるあらゆる活動が効果的に実施されるよう、インターネットを活用し、人材育成情報やボランティア情報の提供、相談活動などを行い、各主体が連携・協力することによりネットワークの形成が図られるよう努めます。
- また、子どもの読書活動の推進に関わるNPOやボランティア団体などの、主体的な取り組みやネットワーク化を促すことにより、優れた取り組みを県内に広め、人材育成やスキルアップを図るなど、県全体として子ども読書活動の活性化が図られるよう努めます。

(3) 市町との連携

- ア 子どもの読書活動の推進に関する施策の総合的な推進を図るため、市町との連携・協力に努めます。
- イ 市町に対し、それぞれの地域の状況を踏まえ、国の基本計画および県の推進計画を基本として、市町の子ども読書活動推進計画の見直しや改訂が実施されるよう働きかけます。
- ウ 市町との連携・協力を図り、市町が実施する子ども読書活動推進事業に関する情報の収集・提供を推進します。

エ 公立図書館と学校図書館が相互に協力・支援できる体制を推進するため、先進的な実践事例の紹介や情報交換の場の提供に努めます。

第5章 指標の設定

この計画では、子どもの読書活動の推進状況を概観できる指標を使って、以下のとおり数値目標を設定します。この指標の達成状況の把握などによって、この計画の進行管理を行っていきます。

指 標 名	現状 (年度)	目標 H35 (2023)
①乳幼児の健康診査時等に、親子に対する読書啓発の取組を複数 回行っている市町数の割合 ※(生涯学習課)	—	100%

(指標設定の考え方) 就学前からの読書習慣の形成には、健康診査時等における親子に対する啓発が重要であり、ブックスタート等の取組が各市町において定着してきていることから、継続して行われる健康診査時に複数回の読書啓発の取組を行っている市町数の割合を指標として設定します。

指 標 名	現状 (年度)	目標 H35 (2023)
②学校の授業以外で平日(月曜日から金曜日)に1日 当たり10分以上読書している児童生徒の割合 ※文部科学省「全国学力・学習状況調査」 (幼小中教育課)	小学校 (6年生)	64.1% (H30)
	中学校 (3年生)	46.8% (H30)
③1か月間に1冊以上本を読んだ高校生の割合 ※「子どもの読書活動に関する調査」(生涯学習課)	59.8% (H29)	70.0%

(指標設定の考え方) 子どもが楽しみながら自主的に行う読書につなげていくことが重要であることから、読書習慣の定着を測るための指標として設定します。

指 標 名	現状 (年度)	目標 H35 (2023)
④学校図書館図書標準を達成している学校数の割合 ※文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」 (幼小中教育課)	小学校	52.7% (H28)
	中学校	33.3% (H28)
⑤学校司書を配置している学校数の割合 ※文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」 (幼小中教育課)	小学校	49.8% (H28)
	中学校	34.3% (H28)

(指標設定の考え方) 学校図書館は子どもにとって最も身近に本に親しめる場所であり、その環境整備や活用が重要であることから、④は資料整備面の充実を、⑤は人的整備面の充実を測るための指標として設定します。

指 標 名	現状 (年度)	目標 H35 (2023)
⑥児童図書の公立図書館での年間貸出冊数(12歳以下の県民1人当たり) ※(県立図書館)	24.1冊 (H29)	25.0冊

(指標設定の考え方) 公立図書館は地域における子ども読書活動推進の中核的な役割を果たすことから、その活用状況を測るための指標として設定します。

(参考資料)

- I 子どもの読書活動の推進に関する法律
- II 文字・活字文化振興法
- III 県内公立図書館等一覧